

# 郷土博物館・文学館だより

## 特別展

### 「ミステリー作家 内田康夫と渋谷」開催中！

テレビのミステリー番組でおなじみの名探偵・浅見光彦や信濃のコロンボ・竹村警部。この生みの親が、作家・内田康夫氏です。

内田氏は昭和 55 年（1980）、栄校出版社から『死者の木霊』で作家デビューを果たしますが、40 代の遅咲きのデビューでした。その当時の住まいが幡ヶ谷駅前にありました。ここで、『本因坊殺人事件』や光彦が初登場する『後鳥羽伝説殺人事件』を書き、ミステリー作家としての地位を不動のものにしました。

会場では、内田氏が幡ヶ谷在住時代に発表した作品や渋谷が描かれた作品を紹介するとともに、内田氏愛用の品やテレビで使われた小道具なども展示しています。

11月12日（土）、12月10日（土）には展示解説を行いました。1月21日（土）にも、午後2時から30分程度、展示解説を行います。



11月12日に行われた展示解説



会場風景

## 渋谷公園通り 誕生

全国には「〇〇通り」と名前がつけられた道路が、数多くあります。幹線道路から商店街までいろいろですが、渋谷にあるものをみなさん、どのくらい知っていますか。

渋谷を代表する通りといえば、まず「竹下通り」があります。ご存知のように JR 原宿駅の竹下口から明治通りまでの通りで、休日となればたくさんの人たちでにぎわう通りです。

もう一つ、忘れてならないのは、渋谷駅付近の神南一丁目の交差点から渋谷区役所までの通り、そう「公園通り」です。

「公園通り」といえば、どのようなイメージをお持ちでしょうか。若者、ファッション、カルチャーなどなど、人それぞれ違うかもしれません。ではそもそも、この名前がつけられたのはどのような理由からなのでしょう。

それは今から 44 年前の昭和 48 年（1973）6 月、「渋谷 PARCO（パルコ）」がオープンしたことに由来します。

以前のこの通りの名称は、「区役所通り」でした。どこにもあるような名前ですが、昭和 40 年に、渋谷区が旧電力館のところにあった庁舎を、宇田川町の新庁舎に移転したことによって、「区役所通り」と呼ばれるようになったのです（現在、渋谷区は同じ場所に新庁舎建設中）。そして「渋谷 PARCO」がオープンしたことで、また新しい名前に改名されたのでした。

「PARCO」とは、イタリア語で「公園」「広場」という意味です。オープニングにあたり、キャンペーンが展開されました。そのキャッチフレーズは、「すれちがう人が美しいー渋谷公園

通り」です。それまでの渋谷駅前の東急百貨店や西武百貨店といった商業施設のイメージに、新たな風を送り込むきっかけとなりました。

アートディレクターに石岡瑛子氏を迎え、オープニングポスターは話題を集めました。その後も、「公園通り」はアート、映画、演劇など文化発信拠点として若者やクリエイターらを呼び寄せることとなりました。

やがてパルコ part2、part3 と規模は拡大し、パルコ劇場、パルコミュージアムなどもでき、平成 15 年に閉館した東急文化会館や渋谷 109 とともに、渋谷から文化を発信する一翼を担う存在となったのです。

昨年の 8 月 7 日、「渋谷 PARCO」は再開業事業に伴う建て替えにより一時休業となりました。休業前には、さまざまなアーティストによる特別イベントが行われ、多くの人でにぎわいました。2 年後の平成 31 年の秋、新しい建物が完成すると、渋谷駅前の「渋谷ヒカリエ」とともに、「公園通り」に再び新風を送り込んでくれることでしょう。



昭和 50 年ごろの渋谷 PARCO

## 田山花袋の『温泉めぐり』

温泉が恋しい季節となりました。

日本の温泉の歴史は古く、すでに飛鳥時代には、有間（有馬）、牟婁（白浜）、伊予の温湯（道後）などへの天皇の行幸や貴族の入湯などが行われ、「風土記」にも出雲玉造、豊後別府、肥前雲仙、撰津有馬、伊予道後などの有名な温泉が記録されています。こうした温泉には、役小角、行基、空海など、高僧による発見伝承があり、温泉は仏教の布教にも利用されていました。

庶民が温泉を楽しむようになるのは、街道や宿場が整備された江戸時代です。伊勢参りをはじめ、富士山登拝、鶴岡八幡宮、金毘羅宮、出雲大社などの社寺参詣を名目とする旅にとともなうもので、中でも江戸から近い熱海、箱根、草津などが栄えるようになりました。

明治になると関所が撤廃され、河川には橋が架かり、鉄道が各地で開通します。さらに、明治45年（1912）にはジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本交通公社の前身）が設立されると、庶民の旅の目的が社寺参詣からレジャーへと変わります。これによって、城下町、門前町、名勝地、温泉地などが観光地として注目されるようになりました。

こうした背景とともに生まれたのが、文学者やジャーナリストたちによって書かれた旅行案内書でした。田山花袋が大正7年（1918）に博文館から刊行した『温泉めぐり』は、その代表的な一冊で、はじめから携帯に便利な旅行案内書となることを意識してか、袖珍本（現在の

文庫本に近い小型本）の体裁で出版されました。

花袋が紹介する温泉は、湯ヶ島、箱根、伊香保、磯部、草津、有馬、熊野、飯坂、大鰐、別府のほか、満州や朝鮮にまで及んでいます。

花袋の好みは硫黄泉らしく、箱根・芦の湯の記述に「私には温泉らしくて好い。いかにも効能がありそうで好い。（中略）玲瓏透徹した炭酸泉も決してわるくはないが（中略）道後、城の崎などという温泉よりも、草津の方が私の趣味に合う」とあります。

また、食通で知られる花袋は、磯部の湯豆腐、日光の風呂吹大根、諏訪湖岸にある温泉の鰻、わかさぎの天ぷらなど、都会ではなかなか口にできない温泉地の郷土食にも言及しています。

「温泉とはなつかしいものだ」という一文ではじまるこの本には、「小さな欄干に今しも湯から上って来たらしい客が、心地好さそうな顔をして、濡れた手拭をそこに掛けて立っていた」というような現代の読者にとっても「なつかしい」描写が随所にあがり、乗合馬車で温泉地に向かう様子などには時代を感じさせます。

この冬は本書から温泉を探し、花袋の追体験をしてみるのも一興ではないでしょうか。



田山花袋 『温泉めぐり』  
岩波文庫 2007年



## 収蔵資料紹介

### 錦絵「角谷製綿工場之真景」

タテ 24.0 cm  
ヨコ 33.8 cm



明治時代まで、渋谷ではいたるところで水車の回る風景をみることができました。ここで紹介する資料は、そうした水車の一つ、現在の鉢山町付近にあった角谷（すみや）水車と、その動力を利用した製綿工場が描かれた錦絵です。明治三〇年（一八九七）頃に作られたものといえます。

この水車はもともと精米に利用されていましたが、のちに製綿の作業用に切り替えられました。製綿工場の経営者の家に生まれ、昭和二八（一九五三）〜三七年に渋谷区長を務めた角谷輔清は、のちに「毎日のように馬車で綿花を運んできて、これを原料に工場で木綿わたをつく」っていた、と当時の様子を語っています。工場の描かれたこの錦絵は、そこで働く人たちが故郷に帰る際のみやげ物として喜ばれたといえます。

最盛期には四十以上もあった渋谷の水車も、大正時代までにはほとんどが姿を消しました。この水車も大正五年（一九一六）に営業をやめています。写真などが残っていないため、渋谷で回っていた水車の姿はほとんど知られていません。この錦絵はその様子がうかがえる数少ない資料の一つです。

#### 【今後の展示予定】

- ◆特別展「内田康夫と渋谷」展  
平成 29 年 1 月 22 日（土）まで
- ◆企画展「なつかしき昭和の暮らし」  
平成 29 年 1 月 31 日（火）～3 月 26 日（日）
- ◆応募展「第 17 回渋谷現代短歌入選作品展示」  
平成 29 年 4 月 1 日（土）～4 月 9 日（日）（予定）  
\* 第 17 回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。
- ◆企画展「渋谷のむかし写真展シリーズ 23」  
平成 29 年 4 月 15 日（土）～6 月 4 日（日）（予定）
- ◆企画展「新収蔵資料展」  
平成 29 年 6 月 10 日（土）～8 月 6 日（日）（予定）

#### 白根記念

#### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は 16:30 まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 1 日以内は 10 名以上の団体料金

※ 60 歳以上の方、障害のある方と付添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東 4 丁目 19-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.33  
平成 29 年 1 月 10 日発行